

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 フロレンティーノ・ロダオ

フロレンティーノ・ロダオ氏の博士論文「フィリッピンにおけるスペインコミュニティー（1935-1939年）——その変化とアイデンティティに対するスペイン内戦とフィリッピン独立準備開始の影響」は、フィリッピンが10年後の独立を前提とした自治政府（コモンウェルス）に移行した1935年から、スペインで内戦が始まり終わった1936-39年までの時期に、フィリッピンのスペイン系コミュニティーが被った変容を、豊富な資料で跡づけた力作である。

本論文はスペイン語で書かれ、本文424頁、文献目録27頁、付属資料28点154頁から成っている。さらに本文は、序論と結論に加え5部14章によって構成されている。

序論で著者は、1935年段階のフィリッピンのスペイン系コミュニティーは、経済的にも文化的にも活力に満ちており、独立フィリッピンにおいて重要な役割を果たす可能性があったが、スペイン内戦が終わった1939年には内部分裂と抗争によって消耗し、フィリッピン社会への影響力を決定的に弱めていたと主張し、その原因がスペイン系コミュニティーのフランコ派内部の醜い抗争と、その結果としてのスペイン・アイデンティティの衰退、および独立へ向けた努力の欠如にあったとの仮説をたてる。

その上で第一部の3つの章では、1898年以後衰退するかと思われたフィリッピンのスペイン系コミュニティーが、アメリカ政府の寛大な政策とアメリカ市場への特恵的な接近によって経済的繁栄を維持したこと、本国からの新たな移民も迎え入れてスペイン人としてのコミュニティーとアイデンティティを維持したこと、各種の宗教行事やスペイン人クラブの催しなどを通して、フィリッピン社会に対しても文化的影響力を維持したことを明らかにする。

続く第二部の3つの章では、イベリア半島での内戦勃発によってフィリッピンでも共和国派と反乱派の争いが起こり、それが後者に圧倒的に有利に進んだことが明らかにされる。それは、元々スペイン系コミュニティーが保守的であったこと、フィリッピン政府もアメリカ当局も口では中立遵守であっても実際には反乱派寄りであったこと、本国からあらたに派遣された共和国派の公使の活動が適切ではなかったことなどによるとされる。

しかしスペイン内戦の影響は反乱派の勝利で終わったのではなかった。第三部は、反乱派内部での伝統的保守派とファランヘ党派の分裂と抗争を描く3つの章から成っている。「フィリピン煙草総合会社」をはじめとするスペイン系主要企業を握る財閥系人脈のリーダーであるアンドレス・ソリアーノと、本国のファランヘ党から派遣されたマルティン・ポウの確執が描写の中心となる。当初はソリアーノらフィリピンに根を下ろした上流階級のリーダー達とファランヘ党は、本国の反乱派を支援すべく、募金やプロパガンダ活動で協力するが、やがて既存の上流階級への批判を秘めたファシズム政党としてのファランヘとソリアーノ派は暴力抗争寸前の対立に至る。この抗争は、フランコ将軍の支持を得たソリアーノらがポウ解任を勝ち取った後までも続いた。

第四部の3つの章では、内戦時代に共和国派と反乱派が本国に送った経済支援の詳細な内容と、やはり両派から本国の戦線に参加した義勇兵の数や素性が明らかにされると同時に、内紛に明け暮れたスペイン系コミュニティが、フィリピン独立へ向けて影響力確保の努力をするどころか、経済活動を鈍化させ、同時にフィリピン社会におけるスペイン的なるものの評判をおとってしまったことが指摘される。

第五部の2つの章は、スペイン系コミュニティの内紛の本質について、またそれが同コミュニティのフィリピン社会内での地位に与えた影響について、分析的にまとめている。著者によれば、反乱派内部の抗争は、ファランヘ党派が予想以上に支持を集めたことで激しくなったが、それは、スペイン系コミュニティを牛耳っていた古い財閥系家族に対する新興の富裕層や、階級的に財閥系家族に及ばない混血やスペイン志向フィリピン人が、社会的認知を求めたところに本質的原因がある。その意味でフィリピンのファランヘ党は、ヨーロッパのファシズム運動と類似しているという。他方、反乱派をスペイン統治時代の教会や軍による抑圧と結びつける共和国派の言説や、反乱派内部の激しい抗争は、スペイン文化に対するフィリピン人の憧れの気持ちに水を差し、スペインのイメージを決定的に低下させた。結果としてスペイン・アイデンティティとフィリピン・アイデンティティが半ばしたスペイン系コミュニティやその周辺にいたスペイン志向フィリピン人のアイデンティティは、後者に傾き、スペイン人のフィリピンへの帰化の波をも生むことに繋がったとされる。

結論において著者は、フィリピン独立において実質的な影響力を残せなくなったという意味において、共和国派も反乱派の2派も含め、スペイン系住民は皆が敗者になったことを確認した後、自分の論文の最大の貢献が反乱派内部の分裂と確執をあきらかにし、またファランヘ党派の性格を分析したことであると結んでいる。

以上のような内容をもつロダオ氏の博士論文については、多くの優れた点を指摘できるが、特に次の四点に注目すべきであろう。

第一にこの論文は、フィリピンのスペイン系コミュニティについて、その構成と活動を総体として明らかにした点が指摘されるべきである。1898年以降のフィリピンにおいて、

スペイン系の人々がどのような状況に置かれ、どのような活動をしていたのかについては、これまで断片的に知られているだけであったが、ロダオ氏はフィリピンの古い人口センサス類、当時存在したスペイン系企業が遺した資料、アメリカ当局の文書、同時代人の伝記などからの情報を元に、再構成することに成功した。それだけでもフィリピン史に対する大きな貢献であると言える。

第二に本論文は、個人レベルにまで分析のメスを入れて、埋もれていた多くの個人の伝記的事実を発掘した。ロダオ氏は、共和派と反乱派双方が発行していた新聞や雑誌の記事、スペインとアメリカの外交文書、遺族などとのインタビューによって、1936-39年に活動した多くの個人を特定し、その人間関係や紛争への関与の性格について明らかにした。スペインへの熱い思いから紛争に参加しながら、友人や知人との抗争の中で深く傷つき、ついには忘却へ逃げようとする人々の困惑をうまく描き出している。

第三に、筆者自らも主張しているように、これまで共和国派と反乱派の対立という図式でとらえられていたスペイン系コミュニティの内紛が、実際には反乱派内部の抗争が中心であったことを明らかにした点がある。スペイン系コミュニティのリーダーであったアンドレス・ソリアーノが従来言われたようなファランヘ党派ではなく、むしろそれと対立する伝統的保守派のリーダーであったことの発見も特筆されるべきである。またフィリピンのファランヘ党がヨーロッパ・ファシズムと似た性格をもっていたという指摘も、ロダオ氏がしたような詳細な運動の分析無しには不可能であったろう。

第四に、上で述べた第一点とも関連するが、フィリピンにおけるスペイン系コミュニティの衰退が1898年ではなく、1930年代後半に始まったことを指摘した点がある。これは、1930年代はじめまでは、スペイン系コミュニティが経済的にも文化的にも、フィリピン社会の中で活発に活動し、フィリピン人の中にもスペインの文化的・宗教的遺産に親近感をもつ者も多かったこと、しかし内戦が終わる1939年以降になると、スペイン系アイデンティティを積極的に主張する動きが見られなくなったことの観察からくる興味深い結論である。

ロダオ氏の博士論文は、以上のように質の高い論文であるが、問題点がないわけではない。最大の問題は、フィリピン自治政府の資料が未公開であったり、紛失したりしたこともあって、フィリピン社会側の分析が不十分な点であろう。内戦期の内部抗争によってスペイン系コミュニティの連帯が崩壊し、アイデンティティが薄れたことは、この論文によって明らかにされたと言えるが、それをフィリピンの市民と政治指導者が、どのように受けとめたのが分析されていないために、内戦を決定的なきっかけとしてスペイン系コミュニティの影響力が衰えたとする著者の議論が十分な説得力をもつに至っていないのである。アメリカ当局の政策変更、日本軍による占領、独立に伴う法体系の変更やナショナリズムの高揚などが与えたインパクトも考えられるので、分析の射程を1946年の独立まで伸ばす必要があるかもしれない。他方、独立後もスペイン語やスペイン文化が上流階級

の表象ととらえられていたことを見ると、スペイン系コミュニティの影響力の評価も慎重におこなう必要がある。

論文の形式に関わる点としては、論文の本筋に関係しないのに過剰な描写がおこなわれている箇所が一部に見られる。

しかし上であげた問題点は、スペイン内戦期のフィリピンにおけるスペイン系コミュニティの動向の分析という本論文の中心的貢献からすれば、周辺的な問題であり、むしろ、新しい資料の発掘も含め、著者の次の仕事として期待すべきことであろう。総合的に言って、本論文のフィリピン史への寄与は非常に大きいと結論づけることができる。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。